スポーツ人類學研究
第 23 号：33- 42. 2021

書　評

ピルッコ・マルクラ，リチャード・プリングル著『スポーツとフーコー』（2021）
千葉直樹訳．晃洋書房

相原　健志*

I　はじめに：フーコーとスポーツ研究

すでにスポーツに関わる人文社会科学的研究において，ミシェル・フーコー（Michel Foucault）の仕事は決して欠かすことのできない参照項になっているといっても過言ではない。彼の提起した概念や発想，言説分析などの方法がスポーツ研究にとって大きな意義を有することはこの数十年，直接的であれ間接的であれ影響を受けた非常に多くの研究が世界各地で上梓されてきたことに端的に表現されている。

本書『スポーツとフーコー』（原題：*Foucault, Sport and Exercise*）は二人のスポーツ社会学者の手になる，フーコーとスポーツを深く交錯させた研究である。著者ピルッコ・マルクラ（Pirkko Markula）はフィンランド出身で，現在はカナダのアルバータ大学に所属し，主としてダンスなどを対象とした社会学的研究に従事してきた。もう一人の著者リチャード・プリングル（Richard Pringle）はニュージーランド出身でオーストラリアのモナシュ大学の教員であり，ポスト構造主義に強く影響を受けたスポーツ社会学者である。

本書の原著が刊行された 2006 年の時点ですでに，フーコーに影響を受けた――本書の表現を用いれば「フーコー派」の――研究が非常に多く蓄積されている。しかし，その半ば必然的な帰結か，フーコー理解の「通俗化」が起きていると本書は冒頭すぐに指摘する（ピルッコ・マルクラ，2021, p. 9）(1)。著者らは，とりわけスポーツ社会学におけるフーコーの民主化の結果として希薄な理解や誤解が流通していることを危惧し，それに抗するかたちで「可能な限り厳密にフーコー自身の研究」（2021, iii）に依拠した「フーコー派」のスポーツ研究をなすことに意義を見出している。

しかし，ここで注意すべき点がある。フーコーとスポーツを交差させる研究だからといって，本書はスポーツの特定の事例を理解するためにフーコーという理論的フレームに訴えたのではない。むしろ，フーコーという理論的フレームがスポーツ研究のために有する意義を実証し，そしてフーコーのより精確な理解をスポーツ研究の文脈に提供することを企図している（2021, iv）。もちろん，事例の分析が重視されていないわけではない。しかし，例えば民族誌的研究のように数々の事例の固有性が優先されるわけではない。むしろ，本書において事例は，フーコーの思考がスポーツの理解のために有効であることを実証するための素材として位置づけられている。本書は事例を理論に先行させるものではなく，この関係を逆転させていることは，以下に内容を紹介する前にまず理解される必要がある。

本評では，まず次章にて本書の論旨を章順に整理する。その際，上記の本書の特性に鑑み，フーコー独自の概念規定を可能な限り本書に即して整理しながら，そこに著者らが見出した意義を明確

*関東学院大学

化したい。そののち，本書の意義および問題点を提示し，今後フーコーとスポーツ研究を交錯させるうえでの展望を描きたい。

II　本書の要旨

本書は合計三部からなる。おおまかにいえば，一部はフーコーに関連する背景的情報と基礎概念の整理に充てられ，二部と三部はそれらの概念と「フーコー派」の理論をより詳細に検討しながら事例を与える構成となっている。二部と三部は，のちに示すように内容の上で相補的な関係にあるが，それぞれ，フーコーのおおむね 1970 年代の規律訓練・生権力論と 1980 年代からの（しかしその死によって中断された）自己論・主体性論に，それぞれ対応する。本章では以下，各部ごとに節を割り当てて内容を紹介する。

1　背景情報と分析のための道具立ての準備

一部一章「ミシェル・フーコーへの導入」では，とくに第二次世界大戦後，1950 年代にスポーツのもつ社会的意義が着眼された経緯が示され，その延長上に 1980 年代からスポーツ社会学にてフーコーが注目されはじめた経緯が整理される。そののちフーコーの生涯における知的関心と思想，その変遷が概略されている。

同二章「支配のテクノロジー」では，フーコーの『知の考古学』，『監獄の誕生』，『性の歴史 I——知への意志』を中心に，その方法と基礎概念，とくに「考古学的方法」，「系譜学的方法」，およびその権力概念にたいしてフーコーの著書にもとづきながら定義が与えられる。本書は「考古学」を，「知」すなわち「言説や思想の体系に関する歴史的分析の方法，もしくはより正確にいうと，人間科学における言説の作用と出現を形成する無意識な『形成の規則』の分析」と規定する（2021, p.43）。この方法に関わる基礎概念として，「言説」もとりあげられる。言説は，ある現実を指示するという作用のみならず，特定の指示対象をも出現させる効果を有し，かつ特定の実践を誘いもすれば隠蔽もする作用を有するものとして定義される。また「系譜学」は，例えば「自己」の自然性が歴史的な偶然の過程のなかで形成されてきたことを明らかにし，かつ権力がいかなる支配・従属を生み出すかを示す方法であるとされる。続いて，フーコー独自の権力概念が整理される。しばしば本邦の概説書でも参照できることであるが，フーコーにおいて権力とは，誰かを支配させる制度や政治体制のことではなく，その意味で「存在論的な実体」ではない（2021, p.53）。あるいは，単に他者を従属・支配し，抑圧するような効果を有するだけでもない。むしろ権力は，他者とのあいだに作用する偏在的な関係のことであり，かつ他者に行為の可能性を与えるもの，よって「生産的なもの」である点が強調される（2021, p.57）[(2)]。さらに，他者との関係として規定される権力は，特定の個人・制度に限定されず，あらゆる人や知識のあいだのミクロレベルにおいて作用する偏在性によっても特徴付けられることが指摘される。そのあと著者らは，この権力論——いわゆる規律訓練論と生権力論——の見取り図を提示する。機能的な空間的・時間的な区分・配置といった技術のもとで個人を監視・管理し，従順な身体を生産するものとして規律訓練を規定し，そこに関わるスポーツ社会学の先行研究が多く言及される。またこの規律訓練の延長上に生権力が，人々の健康や身体の傾向を管理する「もう一つの支配のテクノロジー」（2021, p.69）として特徴づけられ，これに関連する主題として健康づくりのエクササイズや学校体育についての先行研究が整理される。

2　人はいかに支配のテクノロジーの作用をうけるか

二部を構成する四つの章では，一部で整理された方法と諸概念に忠実に，またそれらについてよ

り詳細な説明がなされながら，具体的な事例が分析される。フィットネス（三章・四章）とラグビー（五章・六章）をめぐる言説の形成過程と，それが人々の身体やアイデンティティを特定のかたちで形成させる権力のありかたが探究される。

三章「知と真理」では，まず冒頭で，二章で整理された考古学的方法にもとづいて「健康づくり」を分析するときの論点が整理される。具体的には,知がいかなるものを対象として形成するか，言説がいかなるかたちでなされるか，言説がいかなる概念を生産するか，その概念がいかに集合して一定の理論を構成するか，の四つである。これらを著者らは順に考察する。すなわち，健康づくりにおいて，身体の状態が知の対象として形成され，その言説は医学的・生理学的・心理学的な外装をもってなされる。さらにその知と言説は，心肺機能や筋力を基礎とする「健康関連体力」や，無病であることとしての「健康」といった概念を形成し，健康であることを測定しそれを実現するためにすべき活動についての理論が形成される。この考古学的方法による分析に続けて，著者らは系譜学的方法によって，健康づくりに関わる知と言説が，いかに人々にたいして作用するかという権力分析を始める。健康関連体力の向上を目指す医学的・生理学的に基礎づけられた運動や体力テストは人々を監視・管理し，規律化させる技術——『監獄の誕生』における空間的・時間的区分と配置と等価の技術——であるとされる。さらに，体力テストにより実践者の体力や健康の状況が数値化されることで，当人が運動の必要性を自覚し，規律的な権力の対象として自らを差し出すようになることが論じられる。さらに本章は，規律訓練の延長上にある生権力・生政治と健康づくりの関連性を補足する。健康であることが奨励されるとき，国家の医療費の抑制という目的を伴いながら，人々の健康を管理し，健康な身体を統治する生政治的な特性が健康づくりにみられると指摘される。

四章「運動」は，『監獄の誕生』の要点を詳述しながら，健康づくりにおいてメディアが「支配のテクノロジー」の一部としていかに作用するかが検討される。イギリスの雑誌を中心的な素材として，男性らしさ・女性らしさと関連づけられる理想的な美を表現する身体のありかたが分析される。具体的には，「広い肩，深い胸，ほっそりとした腹回り，美しいプロポーション」をなす男性の身体と（2021, p.124），細く，日焼けし，柔らかい曲線をなす女性の身体が，理念的な身体のありかたとして形成され，さらにこれは美しいだけでなく，健康であること——脂肪が少ないのだから——を表示すると論じられる。さらに本書はここから一歩進み，イギリスの女性誌に付録していた質問紙が，フーコーが『性の歴史』で集中的に論じた「告白」と関連することを論じる。すなわち，質問紙で雑誌の読者が自らの健康状況や生活習慣を「告白」すると，医学的な知のもとでそれらがなんらかの不健康な状態，疾病のリスクと関連づけられて，雑誌の読者は「病的な」状態へと位置づけられて自らの健康状態を絶えまなく監視するよう仕向けられ，さらにその経過を「告白」し続けるよう誘われる。本章の最後では規律訓練の権力への人々の反応として，読者が理想的な——健康であり美しい——身体のありかたに疑いの眼を向けながらも，その反面，その理想型を受容し，それを実現するためフィットネスなどの運動を行っていたことが指摘される。なお，知と言説が行使する権力へ人々がなす反応は，十章にて自己論と関連づけて再び展開される。

五章「スポーツとジェンダー化された身体の言説構築」と六章「ラグビー経験の言説分析とジェンダー・アイデンティティの構築」は，権力がいかに特定のアイデンティティを形成させるかが論じられる，ひとつらなりのパートである。五章は，六章におけるラグビーのプレー経験と男らし

いアイデンティティが構成される過程の分析に向けて，先行研究のレビューと課題の析出を行なっている。具体的には，まずスポーツ史の研究をレビューし，「スポーツが男らしい実践として言説的に構築されてきた」ことが確認される（2021, p.145）。そののちスポーツ社会学に視点が移る。スポーツとジェンダーが新マルクス主義的な観点のもと男性・支配／女性・従属という秩序のもとで問われてきたと述べ，本書はフーコーの理論的枠組みが，一定の新規性を持ちうると述べる。フーコーにもとづけば，男性らしさだけではなく，非男性のアイデンティティの形成までも一望できるからである。初期フーコーの医学史的研究が示唆するように，権力は正常なものや支配的な位置に立つもののみならず，そこから逸脱したものをも対象として形成するのだ。以上を踏まえ，六章で取り組む問いが析出される。すなわち，ラグビーをする男性が自らを，そしてそれ以外の者，とくにラグビーをする女性をいかなるかたちで認識したか，その認識の背後にいかなる言説と権力が作用しているかという問いである。

六章はこの問いにたいして，十四名のニュージーランドの男性を対象にしたインタビューを素材として，解答を試みている。インタビューから，ラグビーがニュージーランドの国技にして男のスポーツであり，暴力的で攻撃的であるという支配的な言説がまず指摘される。当地においてラグビーは男性であればほとんどがプレー経験を有するため，少年時代にはラグビーのプレーは少年としての典型例を構成する経験であり，その反面，プレーをしない場合は普通ではない少年とされる。また年長になるにつれプレーが激しくなるために，適格な者――屈強で体格に恵まれているだけでなく，痛みや怪我に耐え，それらを怖がらない勇気を持つ者――が選別・分類されていき，相関してラグビーは「男のスポーツ」としての特徴を強化される。すなわち，医学的知と言説が健康な者・正常な者と不健康な者・異常者を分類し，隔離し，階層化するのと同様に，ラグビーに関する支配的な言説は，男性の内部で，男らしい者と軟弱で不適格な者を分離し，かつ階層化する。さらに年長になりプレーから離れると，ラグビーへの批判的な眼差しが形成されることが指摘される。ときに後遺症まで招きかねない怪我を軽視してしまったことへの後悔，ラグビー選手たちが粗野で乱暴な振る舞いをしがちであることへの反発や，非常に興味深いことに，ラグビーのレギュラー選手が自宅ではピアノを嗜んでいたもののそれが男らしさの対極にあるとみなされたがゆえに自らの趣味を周囲に話せなかったという事例などが述べられる。さらに，ラグビーをプレーする女性についての男性たちの認識も分析される。著者らは，回答者の大半は女性の参加に条件付きで好意的であるが，ときに非常に混乱していると指摘する。すなわち，回答者たちは女性のラグビーのレベルが高いと認めるし，また男のスポーツであるラグビーに参加することに明示的な反論を与えないものの，女性はラグビーに向いていないとか，出産能力に悪影響を及ぼすといったことも述べる。しかし，女性にたいする本質主義的な言説にもとづく認識を直截に語ってしまうと性差別との誹りを受けるために，回答者たちは「自由主義者のように思われ」るべく，表面上は，例えば彼女らが怪我のリスクをわかっているならば，とか，彼女らがやりたいことならば，とかの条件のもとで女性の参加を容認するのである（2021, p.202）。このように考えたとき，ラグビーにおける男らしさ，および女性の参加は，フェミニズム，自由主義，男女平等，性の本質主義，男らしいスポーツとしてのラグビーをめぐる多様な知と言説が複雑に交渉しあうなかで認識されていると分析される。

3　自由を求めるために

三部は，自己が主体となる方法としての，フー

コーのいう「自己のテクノロジー」を軸に考察がなされる。具体的には,『性の歴史』の第二巻『快楽の活用』と第三巻『自己への配慮』を基盤にしつつ,個人が道徳的な規範を自らに照射し,それにもとづいて自らを解釈し,主体化する過程が考察される。さらにこの過程が,規律訓練の権力がもたらす従順な身体からの脱却,支配のテクノロジーへの抵抗の可能性の条件を構成すると論じられる。その点で三部は,二部では十分に明確化されなかった点を補完する役割を果たしている。

七章「自己のテクノロジー」は,表題をめぐるフーコーの思想が集中的に整理される理論的準備の章である(その意味で,二部にたいする一部二章と同じ役割である)。とくにフーコーにしたがって四つの「主体化の様式」があげられる。第一に「倫理的実質」の問題化である。なにが道徳的な行為・状態なのかを考え,道徳規範と照合して人が自らの修正されるべき部分を反省的に——「自己への配慮」をなしながら——特定する営為である。次に「服従化の様式」とは,人がそれを実現するべく駆り立てられる生の様態である。例えば古代ギリシャにおける美しく高潔な生がこれに相当する。三つめにフーコーが「自己の実践」と呼んだ「倫理的作業」であり,これは人が自らを道徳的な規範に適合する主体となるために用いる方法,技術,またそれを用いた活動である。最後は「目的論」。これは上記の作業の結果として達成される生のありかたを含意する。本書はこの「自己のテクノロジー」が,とくに二部で考察されたようなスポーツをめぐる知と言説,そこで行使される権力が生み出すアイデンティティとは異なるかたちを思考し実現するために有益であると主張する。「自己への配慮」によって自らの現状のありかたを問題化することで,権力が生産し促してくる存在の仕方とは別様のものへと至る可能性が開かれる——このとき自己のテクノロジーは,「自由の実践」となる。これをさらに本書は,フーコーにもとづき,既存の権力のなかで自己を一種の芸術作品となすこと,「自己の美的な様式化」だと換言する。

八章「美的な自己様式化」は前章での理論的準備にもとづいて,ロンドンのスポーツジムにてマルクラが行なった参与観察が分析される。著者らによれば,このジムは,ヨガや太極拳などを組み合わせたマインドフル・フィットネスである「ハイブリシス(Hybrisise)」を実践している。三章・四章で取り上げられたフィットネスの実践が再掲されていることからも示唆されるように,どのような実践であれ,規律的な権力が行使されて従順な身体が形成される可能性も,あるいはそれとは逆に別様の存在の仕方を形成させる可能性も潜在している。本書によれば,いずれの方向に進むかを定めるのは,現行の知と言説を批判的に眼差し,かつ「自己への配慮」をなすかどうかである。ハイブリシスであれば,規律訓練の権力がもたらす,「引き締まり細い女性らしい肉体」を欲望するほうへと進むか(2021, p.259),あるいはハイブリシスの創始者へのインタビューから示唆されたように,理想的な身体と伝統的なフィットネスの実践を批判的に眼差し,新たな身体のありかたを目指すかである。しかし八章は,この二つの分岐が非常にミクロなレベルでしか看取されず,かつ「自由の実践」が危ういバランスのなかでなされることを示している。別言すれば,批判的思考を欠いたとき,「自由の実践」はいつでもその潜在的な力を喪失してしまう——「健康づくりの実践は,自由の実践と同時に支配の技術として役割を果たしうる」(2021, p.290)のである。

九章「自己への配慮の倫理」と十章「真理の倫理的なゲーム」は,既存の知と言説が行使する権力にたいしてスポーツ研究者がなしうる「自由の実践」の2つの具体例が検討される。九章では,書くことが自由の実践として持つ可能性が論じられる。フーコーが晩年に着眼した古代ギリシャに

おいて備忘録を書くという営みは，「自己への配慮」の一形態としての「鍛錬」の実践であった。「節制，暗唱，良心の精査，瞑想，他者（の話）の傾聴」（2021, p.285）といった，自らに訪れた出来事などを書き留める備忘録の実践は，自らを振り返り，自己が自らにたいしてもつ関係を絶えまなく修正し続ける批判的な，そして潜在的に自己変容をもたらしうる実践と価値づけられる。これをもとに八章の調査時にマルクラが残した備忘録が自己分析されるが，そこには批判的な思考がほとんど含まれておらず，自由の実践として成立したかどうかが断定できないと自ら考察する。

十章では 1980 年代の教育学における学校と教師の抑圧性を批判する研究動向を背景に，フーコーが教育学のなかで着目された経緯が整理されたのち，ラグビーの男らしさをめぐる言説――プリングルが調査した，幼少期からラグビーを始めたものの，ラグビーにたいして徐々に批判的な考えを持ち始め，辞めることを決めた男性の語り――を題材にプリングルが大学で行った授業が考察される。そして，フーコーにしたがって，「自由の実践」がもたらしうる「主体性の新しい形式」（2021, p.311）がこの授業を起点として生じたかが検討される。具体的には，ラグビーの知と言説による権力の作用のなかで「周辺化された知」――六章で見たような男らしさとは異なるありかたについての知――を人々のあいだに流通させる戦略は可能か，すなわち「批判的な熟考を奨励し，ラグビー・アイデンティティの構築を取り巻く言説を問題化する機会を人々に与える」ことは可能かが検討される（2021, p.315）。その結果，この授業を受講していた一人の学生がスポーツと男らしさのつながりに疑問を持ち，それを問題化する研究を開始したことが述べられる。

ただ，既存の知や言説が行使する権力への抵抗――それを問題化する批判的思考から始まる自由の実践はその抵抗として位置付けられている――の困難さを，本書は一貫して指摘している。自由の実践はいつでも規律的な支配の技術に転化する危険があり，かつ成功したとしても特定の個人がなすだけにとどまり「局地化」する傾向があるとされる（2021, p.272）。自由の実践が既存の知と言説を根本的に変容させるには，「周辺化された知」が一定の規模をともなって人々のあいだに流通する必要があるとされるが，しかしその困難さを著者らは決して隠していない（e.g. 2021, p. 138-139, 204-207, p. 319-320）。

では，このような構成をなす本書の意義と問題点を，続いて検討したい。

Ⅲ　本書の意義と問題点

1　本書の意義

本書の意義は第一に，社会学・歴史学・教育学の分野における 1980 年代から 2006 年までの「フーコー派」のスポーツ研究，またフーコーへの明示的な言及はなくとも関連しうるスポーツ研究まで網羅的に論及した点にある。また，各章にてフーコーの諸概念や思索との関連性が明確なかたちで, 多くのスポーツ研究がマッピングされている。その点で，フーコーとスポーツの人文社会科学的研究の交差点を探究する際に，本書は（2006 年までではあるが）辞書的な役割を果たすことが期待される。

また，可能な限りフーコーの引用に依拠しながら考察が展開された点も本書の大きな意義の一つである。それにより本書は，フーコーの仕事に内在的になったときにいかなるかたちでスポーツ研究がなしうるかを例証している。とりわけ，三部で中心的に展開されているフーコーの自己論とスポーツの事例を交差させる試みは，本書のなかでも示唆的な箇所だろう。なぜなら，本書も述べるようにフーコーがスポーツの人文社会科学的研究

を喚起するとき,主としてその規律訓練論――『監獄の誕生』がその結晶であり，身体が権力の行使の対象として構成されるという枠組みが提示された――が参照されることが多く（e.g. 下竹 2019; 多木 1995），後期の自己論に喚起された研究は少ないと思われるからである。

ここでは評者より，規律訓練論以外のフーコーに依拠したスポーツ研究を展開するために本書が与えてくれる示唆を二点，述べておきたい。

一つめとして，本書の三部九章で展開された「備忘録」の議論の可能性である。自らにふりかかかった出来事を記録する古代ギリシャの備忘録は,おそらくフィールドノートとの類似点がある。すでに紹介したようにフーコーにおいて備忘録は「自由の実践」をなす技術とされ，自己変容をもたらすと同時に既存の知と言説を問題化する契機をもたらすとされる。確かに，著者らは注意深くも備忘録とフィールドノートとの差異に論及している（2021, p.290）。しかし，その説明は決して手厚くなく，必ずしも明確であるはといえない。加えて，近年フィールドワークあるいは人類学が自己変容をもたらす潜在的な力を有しているという議論を踏まえれば（e.g. 箕曲ほか 2021），備忘録の実践とフィールドノートを書くことを重ね合わせ，その可能性と意義を検討する余地は大いに残っていると言えるだろう。実際，管見の限りここに関わるスポーツ人類学的研究としては，フィールドワークを反省的に主題化したブラウネルによる論考しか思い当たらない（Brownell 2006）。

二つめに，大学における授業が学生たちにいかなる「自由の実践」を提供しうるかという本書十章の論点を敷衍する可能性である。本書は，プリングルによる授業の結果，既存の言説や知を問題化する学生が一名現れたことにのみ言及し，その学生のその後に触れていない。しかしこのことは，体育・スポーツをつうじて生産される規範的な身体のありかたを学生がいかに問題化し，それと異なる身体のありかたをどのように想像するのかといった問題，換言すれば，大学教育におけるスポーツ科目が「自由の実践」になりうるならば，それはいかにして十全なものとなることが可能なのかという問題が残っていることを，含意するだろう。高等教育の場でスポーツの実技科目や講義科目を担当するスポーツ人類学の研究者が，自らの授業実践を反省的に思考する方向性の一つが開かれていると考えられる。

2　フーコーの解釈をめぐって：評者からの応答

以上のような意義を有する本書は，他方で，フーコーの思考を軸として展開されるからこそいくつかの困難を抱え込んでいる。フーコーに限らずともスポーツに言及しない理論的研究を参照するときの常であるが，その困難は，当の理論的な研究の読解の妥当性・正確性に関わっている。以下，本書におけるフーコー解釈に関わる諸問題を，近年のフーコー研究を参照しながら評者から提起したい。それらは，「可能な限り厳密にフーコー自身の研究」に依拠する試みである本書にたいする評者からの応答である。そして本書がそのような試みであるからこそ，以下の問題は，本書を背景として今後スポーツ研究者がフーコーをより精確に理解しようとしたとき，今後のフーコー研究の動向を注視しながら検討されるべき課題として位置づけうるだろう。

第一に，とくに本書第二部において用いられている「考古学的方法」と「系譜学的方法」の関係である。本書はこれら 2 つを相補的なものとして統合することで，言説がいかに形成されたか，言説がいかなる権力を行使するかという，それぞれの方法に対応する 2 つの異なる論点を連続させている。しかしフーコーの方法論をめぐる研究をいくつかみる限り（相澤 2005; 坂本 2021），これらの方法の関係は決して本書が想定したほど単純ではない。それにもかかわらず本書はこの方法論的

問題を曖昧なまま放置し，ほとんど検討していない。

第二に，美的な（aesthetic）自己様式化についてである。九章にて展開された備忘録の実践は，高潔で美しい生を探究した古代ギリシャに遡るものであり，確かに美的性格と結びつくだろう。しかし，その「美的」の意味が勘違いされていると思しき箇所がある。同章は，マインドフル・フィットネスが「美的な実践」であると指摘するが，そこでいう「美的」は体幹を整え姿勢を改善すること，身体の外形的な美，あるいはせいぜい心身の不調の回復と結びつけられているように見える（2021, p.292）。しかし，三部で依拠されるフーコーの小論「啓蒙とはなにか」と，美学者の武田によるフーコー研究（2021）にもとづく限り，この結びつきが妥当なのか疑義が残る。というのもフーコーにおいて「美的」は，眼前の物体の形態・外見に関わるというよりも，いまだ実現していないがやがて来るべきものの特性と，それを捉える感性・想像力といった思考の能力と形式に関わるからだ。同章の議論は「美的」であることが視覚的な美へと引きずられており，その調査対象の人々が想像力をいかに用いたのか，権力がもたらす存在の仕方とは別様の仕方をいかに想像したかにほとんど論及しない。その結果，フーコーにおける「美的」の含意と十分に対応しておらず，少なくともこの点についてはフーコーの議論に依拠する意義が曖昧になっている。

また，フーコー理解に関わる論点以外にも，本書には以下の問題点があると考えられる。

まず，本書はほぼフーコーの仕事の英語版を参照しており，その点で「厳密」という著者らの自己評価をそのまま受け取ることができるのか懸念が残る。本書の狙いに照らせば，そのフランス語ないしドイツ語原著の参照は必須だったはずである。

さらには，致命的になりかねない欠落もある。それは，フーコーのコレージュ・ド・フランスの講義録にまったく言及していない点である。その講義録は，著書と同等の研究上の意義を認められている（e.g. 檜垣 2010, pp. 128-160; 慎改 2019, p.230-233）。本書の原書が刊行された時期にはすでに複数の講義録がフランスで刊行されており，これらを参照しなかった理由がどこにあるのか，強い疑念が残る。とりわけ，本書刊行前の2004年に出版された講義録『生政治の誕生』と『主体の解釈学』が，二部の生権力論と三部の自己論にそれぞれ高い関連性があるにもかかわらず一切言及されていないのは，本書が抵抗しようとしたはずのフーコーの「通俗化」をかえって助長する恐れがあるのではないか。

3　訳書としての慎重さと丁寧さの欠落

さらに，「通俗化」という点では訳業にも不満が残る。本書の訳文には緻密な逐語訳が与えられているが，細かな――しかもごく基本的といってよい――誤訳や誤記が散見される。例えば「グローバル（global）」ではなく包括的，せめて全体的という訳語がより適切だっただろう（2021, v.）。またクレルモン＝フェラン（Clermont-Ferrand），レーモン・ルーセル（Raymond Roussel）が一般的な表記であるし（2021, p.19），「芸術（art）」ではなく技法と訳すべきだろうし（2021, p.73）(3)，七章で名が挙がる「ボードリヤール」はボードレール（Baudelaire）の誤りで，九章にて言及されるフランスの哲学者「ハドット（Hadot）」はアドと表記すべきである。誤訳は決して過剰に多いわけではないし本書の核心の部分を損ねるものではないものの，本書の狙いを考慮すれば，誤訳に加えて以下のような問題を指摘せざるをえない。

「訳者あとがき」で訳者はフーコーを，いかなる条件付けも留保も説明もなく，「社会現象を主観的に解釈するポスト構造主義の思想家」（2021, p.364）と呼んでいる。フーコーをいかなる符牒

でもって――歴史学者なのか思想家なのか哲学者なのか，あるいはまた別の名なのか――呼びうるのかはすでに多くのフーコー研究が慎重になっている(e.g. 檜垣 , 2010:7)。また本書も，冒頭すぐ「フーコーを一つの『箱』に入れようとすることの難しさ」に言及し（2021, p.11），そののちも一貫して彼を特定のラベルで呼ぶことを慎重に避けた論述を展開している。さらに，本評でも繰り返し触れたように，著者らはフーコーの厳密な理解を試みており，全面的な成功とはいえないまでもフーコーの「通俗化」を避けようと一貫している。これらの点に鑑みたとき，訳者が留保も説明もなくフーコーを上記のように符牒付けしたのは，いかなる根拠があってのことなのだろうか。フーコー研究者らと著者らの慎重な態度に抗して特定の符牒と語彙でフーコーを呼ぶのであれば，その慎重さに相対するに十分な論拠を示すべきだっただろう。

また，すでにフーコーの仕事は大部分が――書籍のみならず小論やインタビューなども――邦訳されている[(4)]。しかし，本書の文献リストにはフーコーの既存の邦訳が付記されていないものも多く，本文の引用部にも邦訳の対応箇所が付記されていないところも少なくない。すでに述べたように，本書の特長の一つとして，スポーツ研究の主題とフーコーの思索の関連性を明快にマッピングした点と，フーコーに関連するスポーツ研究の動向についての辞書的役割があるが，本書を踏まえてフーコーの邦訳や原著に当たろうとする読者の利便性が十分に配慮されているとは言い難い。また，利便性ということでいえば，原書末尾にあった人名・用語索引が訳書にて削られているのも残念である。

フーコーのような重厚な思索を展開した論者を扱う本書を翻訳する難しさはあるにしても，ごく基本的な語句の誤訳や固有名の誤記，フーコーへの軽率な呼称は容易に回避できたはずであり，結果としてこの訳業の信頼性は部分的にであれ損なわれてしまっている。さらに，文献リストでの邦訳の付記の不十分さにも表れているように，全体として訳書としての慎重さと丁寧さに欠けているように思える。

IV　本書ののちに

ともあれ，繰り返すように本書はフーコーの仕事に依拠しながらその枠組みのなかでスポーツを考察した研究である。その意味で，本書の原書を読む負荷を考慮すれば，邦訳の刊行が望ましいことに変わりはないだろう。加えて，2018 年に遺稿がフランスで刊行され，その邦訳も 2021 年に出版された（フーコー , 2021）。さらに関連した論集が本邦で発刊されるなど（e.g. 小泉・立木 , 2021），フーコーがこの数十年もたらしてきた広範な影響力と喚起力は尽きるどころか，ますます高まっている。こうした状況のなかで，フーコーに関連するスポーツ研究の邦訳が刊行されたことは，時宜を得ていると言えるだろう。

その意味で本書は，もはや圧倒的な研究上の背景であるフーコーを，スポーツの人文社会科学の文脈のなかでいまいちど精確に読解し，いかなる意義があるのかを再考する機運を高めてくれるかもしれない。少なくともその契機を与えてくれることは本書から十分に期待できると考えられる。

【注】

(1) 以下，煩雑さを避けるために，本書の典拠を示す場合には著者名を省略する。
(2) 以下，特に指示のない場合を除き，傍点強調は訳書にしたがっている。
(3) この箇所はフーコーからの引用部であるが，そのフーコーの訳書では「技法」と訳出されている（フーコー 2001: 383）。後述のように，フーコーの邦訳を丁寧に確認すればこの誤訳は確実に避けられたはずだ。
(4) この訳書が文献リストでフーコーの小論などの邦訳を示すとき，筑摩書房から刊行された『思考集成』の選

集版『フーコーコレクション』を用いている。そのためか，前者に収録されているが後者にはない論文の邦訳などは，この訳書の文献リストに付記されていない。また，本書の原書にもフーコーの仕事のフランス語版は示されておらず，フーコーの原著を読者が自ら探す手間がある点は原書も同様である。

【文献】

相澤伸依（2005）ミシェル・フーコーの方法論：系譜学の導入について．実践哲学研究，28:1-20.

Brownell, Susan. (2006) Sport ethnography: A personal account. Dick Hobbs and Richard Wright (eds) The Sage Handbook of Fieldwork. London: Sage, pp.243-254.

フーコー，ミシェル（1999）ニーチェ，系譜学，歴史．ミシェル･フーコー思考集成 IV（伊藤晃訳）．筑摩書房：11-38.

（2001）性現象と孤独．ミシェル・フーコー思考集成 VIII（慎改康之訳）．筑摩書房 : 380-392.

（2021）性の歴史 IV――肉の告白（慎改康之訳）．新潮社.

檜垣立哉（2010）フーコー講義．河出書房新社.

小泉義之，立木康介編（2021）フーコー研究．岩波書店.

箕曲在弘，二文字屋脩，小西公大編（2021）人類学者たちのフィールド教育:自己変容に向けた学びのデザイン．ナカニシヤ出版.

坂本尚志（2021）言説，科学，イデオロギー――「セクシュアリテの考古学」から「セクシュアリテの系譜学」へ．小泉義之，立木康介編，フーコー研究．岩波書店 : 55-73.

下竹亮志（2019）運動部活動における「指導者言説」の歴史社会学序説――教育的技法としての「規律」と「自主性」に着目して――．スポーツ社会学研究，27(1): 59-73.

慎改康之（2019）フーコーの言説．筑摩書房.

武田宙也（2021）フーコーと現代性の美学．小泉義之，立木康介編．フーコー研究．岩波書店：201-217.

多木浩二（1995）スポーツを考える．ちくま新書.